

日本語における心理述語の名詞化に関する一考察

: 事象解釈に焦点を当てて

Nominalization of Japanese Psych-verbs:
With a Focus on Eventive Interpretations

田中 明子
Akiko S. TANAKA

要旨：英語の心理動詞構文は、心的状態や心的状態の変化を表す動詞と2つの文法項からなる。2つの文法項の意味役割は、心的状態または心的状態変化の担い手を表す経験者とそのような状態変化をもたらす原因または対象である。Postal (1971)¹⁾の分析に始まる長い研究の歴史の中で、*love* (愛する) や *fear* (恐れる) のように経験者が主語、対象が目的語である心理動詞を含む文はそのままの語順で名詞化されるのに対して (例: *John loves Mary.* → *John's love of Mary*), *please* (喜ばす) や *surprise* (驚かす) のように主語が原因、目的語が経験者である心理動詞を含む文を名詞化するとその心理述語構文とは語順が逆になることが知られてきた (例: *The music pleased John.* → *John's pleasure at the music*)。このタイプの動詞は語彙概念構造の状態変化の部分が名詞化されている可能性が影山 (2008)²⁾ などにより指摘されている。一方、日本語においてはこのタイプの心理述語は使役で表現されるため、語順が逆になる現象は起こらない。本稿では日本語の心理動詞と心理形容詞を対象にして名詞化の意味を考察し、心理状態の名詞化という一般化によって、動詞タイプが異なる場合の共通性を捉えた。

Abstract: A psychological verb (psych-verb) is a dyadic verb that has two distinct arguments, experiencer and theme. In English, the word order remains unchanged when sentences with a subject-experiencer (SE) verb are nominalized (e.g., *John loves Mary.* → *John's love of Mary*), but the word order is reversed in the nominalization of sentences with an object-experiencer (OE) verb (e.g., *The music pleased John.* → *John's pleasure at the music*). This has been known from as long ago as Postal's (1971)¹⁾ analysis. According to Kageyama (2008)²⁾, the state of the base verb's Lexical Conceptual Structure (LCS), []y BE AT-[]z, becomes profiled in the former case, but the event, change of state, [John EXPERIENCE y] CAUSE [BECOME [John BE AT-psychological state]] is nominalized in the latter case. In Japanese, where OE verbs are formed by the addition of the causative morpheme *-(s)ase*, however, sentences with an OE verb are not nominalized (e.g., *Sono ongaku-ga Taro-o yoroko-base-ta.* → **Sono ongaku-ni yoru Taro-no yoroko-base*). Following this previous work, this paper examines the meanings identifiable in the nominalization of Japanese psych-verbs of various types, together with psychological adjectives in the language. The results show that, in their nominalized form, psych-verbs express the psychological states of the experiencers.

キーワード：心理動詞, 名詞化, 事象解釈, 経験者, 心理状態

Keywords: psychological verb, nominalization, eventive interpretation, experiencer, psychological state

1. はじめに：英語における心理動詞の名詞化

英語の心理動詞構文は、心的状態や心的状態の変化を表す動詞と2つの文法項からなる。2つの文法項の意味役割は、心的状態または心的状態変化の担い手を表す経験

者と、そのような状態変化をもたらす原因または対象である。Postal (1971)¹⁾の分析に始まる長い研究の歴史の中で、経験者が主語、対象が目的語である(1a)の構文はそのままの語順で名詞化されるのに対して、原因が

主語、経験者が目的語である (1b) の構文を名詞化すると語順が逆になることが知られてきた。

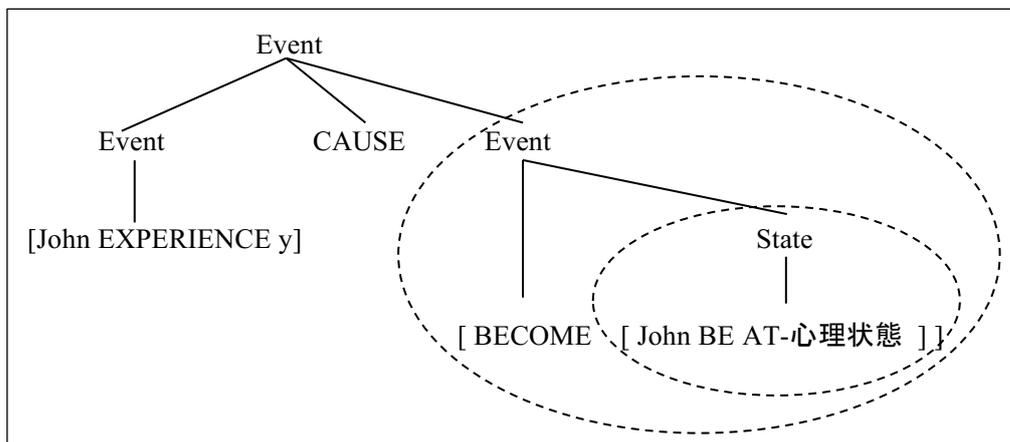
- (1) a. John loves Mary. → John's love of Mary
 John fears the teacher. → John's fear of the teacher
 b. The music pleased John. → John's pleasure at the music
 The news surprised John. → John's surprise at the news
 cf. John was pleased at the music.
 John was surprised at the news.

経験者が主語の位置にある (1a) の構文では、他動詞 love (愛している) と fear (恐れている) が転換によって love (愛情) と fear (恐怖) に名詞化されると、主語にあたる John は所有格 John's, 目的語にあたる Mary や the teacher は of で標示される。同様に、経験者が目的語の位置にくる (1b) の構文でも、他動詞 please (喜ばせる) が派生接辞によって pleasure (喜び) に、また、他動詞 surprise (驚かす) が転換によって surprise (驚き) に名詞化される。ただし、ここでは、主語にあたる the music と the news は前置詞 at, 目的語にあたる John は所有格 John's で表現されなければならない、能動態に対応する語順をとる (2) のような名詞化は非文法的である。

- (2) *The music's pleasure of John
 *The news's surprise of John

このように、経験者を表す補語は、心理述語構文の中では異なる文法関係を担うにもかかわらず、名詞化されると同じ文法関係を担うことについては、影山 (2008) ²⁾ などにより、経験者が主語である (1a) の構文に現れる love や fear が名詞化される場合は基体動詞の語彙概念構造 (3a) の State 全体が取り立てられているのに対して、経験者が目的語である (1b) の構文に現れる please や surprise が名詞化される場合は基体動詞の語彙概念構造 (3b, b') の状態変化の名詞化である可能性が指摘されている。いずれのタイプの心理動詞構文においても、名詞化されたときに取り立てられる語彙概念構造の State または Event の中で、経験者は BE の主語項であり、い

(3b')



ずれのタイプの心理動詞も、名詞化されたときに持つ事象解釈は経験者が持つにいたった心理状態である。

- (3) a. [ly BE AT- [lz
 b. [John EXPERIENCE y] CAUSE [BECOME
 [John BE AT-心理状態]]

(cf. 影山 2008: 248)

これらの研究をふまえ、本稿では日本語の心理動詞構文がどのように名詞化されるのかを考察する。まず、第2節では連用形からの転換名詞が事象解釈を持つ例について観察する。次に、第3節では形容詞や形容動詞と共通の語幹を持つ心理動詞の名詞化について観察する。動詞連用形の名詞用法が結果名詞の解釈をもつ心理述語について観察した結果については別稿に譲ることとし、第4節で今後の課題を述べる。心理述語の選択には『分類語彙表』³⁾ の体の類、用の類、相の類それぞれの「精神および行為」の項目を参照した。また、名詞用法の例は『朝日新聞デジタル』⁴⁾ に掲載された記事やその見出しと『大辞林』⁵⁾ を参考にして筆者が作成した^{注1)}。名詞用法の判断は筆者の内省であり、非文法的な文には「*」、容認度の低い文には「?」、 「??」をそれぞれ文頭に付した。

2. 心理動詞の連用形からの転換名詞：事象名詞解釈を持つ場合

第1節で観察した英語の心理動詞構文の内容は、日本語においても心的状態を表したり心的状態変化をもたらしたりする動詞と2つの文法項からなる文で表現することができる。しかし、動詞の連用形からの転換によって名詞化することができるのは経験者が主語の位置にある (4a) の文だけであり、経験者が目的語の位置にある (4b) は名詞化されない。

- (4) a. 太郎が花子を愛している。→花子への太郎の愛^{注2)}
 太郎が花子を恐れている。→花子への太郎の恐れ
 b. その音楽が太郎を喜ばせた。
 → * その音楽による太郎の喜ばせ

その知らせが太郎を驚かせた。

一 * その知らせによる太郎の驚かせ

c. その音楽が太郎に喜ばれた。

一 * 太郎によるその音楽の喜ばれ

² その知らせが太郎に驚かれた。

一 * 太郎によるその知らせの驚かれ

経験者が主語である(4a)の文が名詞化されると、英語の心理動詞から作られた転換名詞と同様に、心理動詞の連用形から作られた転換名詞が事象解釈を持ち、経験者は「太郎の」のように「の」を伴った形、対象は「花子への」のように「意味格 + の」を伴った形で標示することができる。一方、経験者が目的語である(4b)の文は、そのままでは名詞化することはできない。これは、これらの文に含まれる動詞が「喜ぶ」や「驚く」の未然形に使役の接辞が付加された動詞であるためであると考えられる。心理動詞に限らず、使役の接辞-(s)ase(ru)が付加された動詞の連用形からの転換名詞は、「知らせ」のように語彙化された名詞や、「別れさせ」のように特定の業界内で使われる用語に限られる²³⁾。また、(4c)が示すように、受け身の接辞が付加された動詞の連用形も、「斬られ役」のように動作主を表す「一役」を伴う派生語に現れることはあっても、そのまま名詞として使われる例はないようである。

このように、統語的な派生の接辞がついた動詞の連用形からの転換名詞はないことから、経験者が目的語である(4b)のタイプの心理動詞構文はそのままでは名詞化することはできず、また、対応する受け身の文も名詞化されることはない。名詞用法のもととなるのは、経験者を主語にとる動詞「喜ぶ」や「驚く」を含む(5)の文であると考えられる。

(5) a. 太郎がその音楽を喜んだ。

一 その音楽に対する太郎の喜び (は終演後まで続いた。)

b. 太郎がその知らせに驚いた。

一 その知らせによる太郎の驚き (は今も消えない。)

転換名詞の「喜び」や「驚き」が、経験者の心に生じた感情を表す結果名詞であるのか、経験者が持つにいたった心理状態を表す事象名詞であるのかの区別は難しいが、(5)の例では、転換名詞が喜び続けている状態や驚き続けている状態を表すと解釈することが可能である。経験者が主語である(4a)の文と同様に、ここでも転換名詞「喜び」や「驚き」は事象解釈を持ち、それ以外の補語は、「太郎の」のように「の」を伴った形と「その

音楽に対する」のように「に対する」を伴った形、または「その知らせによる」のように「による」を伴った形で名詞を修飾することができる。

このように、日本語では経験者が主語の位置にくる心理動詞構文のみが名詞化でき、経験者が目的語の位置にくる心理動詞構文は名詞化できない。このことは、英語では経験者を目的語にとる心理動詞を含む文が能動態に対応する(2)のような名詞化を行わないことと類似している。経験者を主語にとるのか目的語にとるのかにかかわらず、心理動詞が名詞化されると経験者が持つにいたった心理状態を表すのだとすれば、日本語の心理動詞が使役や受身形の名詞化を行わないことも自然なことのように思われる。(4b)に挙げた統語的な使役形「喜ばせる」などとは異なり、(6a)に挙げた語彙的な使役形は名詞用法が可能であるが²⁴⁾、転換名詞が表すのは経験者が持つにいたった心理状態ではなく、経験者が被った行為である。また、受け身形で使われることが多いと思われる(6b)の心理動詞は、(4c)に挙げた受け身形「喜ばれる」と同様に、連用形からの転換名詞が事象解釈を持つことはない。

(6) a. おどかす, じらす, あまやかす など

強盗が銀行員を大声でおどかす。

一 銀行員に対する強盗のおどかし

b. あっけにとられる, あてられる, ほだされる, つまされる など

工場長が新入社員の熱意にほだされた。

一 * 新入社員の熱意による工場長のほだされ

cf.² 新入社員が工場長をほだす(営業をした)。

一 * 工場長に対する新入社員のほだし

(6b)の動詞の連用形に名詞用法がないのは、前述したように、受身形は原則として名詞化されないためであると考えられる。「ほだされる」のもとになる動詞「ほだす」には、刑具や絆を意味する連用形からの転換名詞「ほだし」がある。しかし、この動詞が含まれる能動態の文や、「あてられる」や「つまされる」のもとになる動詞「あてる」や「つむ」を含む文は、必ずしも受動態の文と同じ内容を表すとは限らない。(4b)の「喜ばせる」や「驚かせる」とは異なり、(6b)の受身形を含む文には名詞化のもとになるような、対応する能動態の文もないということかもしれない。

日本語の心理述語が名詞化されると経験者が持つにいたった心理状態を表す事象名詞の解釈を持つようになることは、形容詞や形容動詞に「がる」を付加することによって作られた動詞の連用形が事象名詞の解釈を持つこ

とはないことも説明しているように思われる。詳細は別稿に譲るが、「がる」がついてできた動詞の名詞化は可能であり、例えば、形容詞「こわい」に「がる」を付加した動詞「こわがる」の連用形「こわがり」が名詞化されると、ちょっとしたことでもこわがる臆病者を表す結果名詞の解釈を持つ。しかし、派生のもとになる形容詞や形容動詞が和語である(7a)、漢語である(7b)、複合語である(7c)、そして程度のはなはだしさを表す接尾辞「-ない」を付加して派生された(7d)のいずれの動詞にも、事象解釈を持つような連用形からの転換名詞はない^{注5)}。

- (7) a. 煙たがる, 楽しがる, 嬉しがる, 面白がる, おかしがる, 苦しがる, 寂しがる, わびしがる, あじけながる, 哀れがる, 鬱陶しがる, 悩ましがる, 煩わしがる, 面倒くさがる, こわがる, 恐ろしがる, 恥ずかしがる, 面はゆがる, 照れくさがる, もどかしがる, はがゆがる, じれったがる, 惜しがる, 悔やしがる, 口惜しがる, ありがたがる, いやがる, 憎がる, いとしがる, いとおしがる, なつかしがる, 恋しがる, うらやましがる, ねたましがる, いまいましがる, うらめしがる, かわいがる, いじらしがる, 気の毒がる, 憎らしがる, ゆかしがる, 頼もしがる, 奥ゆかしがる, 忌々しがる など
 子供が地震をこわがる。
 → * 地震に対する子供のこわがり
 cf. 子供が地震に感じるこわさ
- b. 得意がる, 窮屈がる, 愉快がる, 億劫がる, 不気味がる, 残念がる, 無念がる など
 常連客が閉店を残念がる。
 → * 閉店に対する常連客の残念がり
 cf. 常連客が閉店に感じる残念さ
- c. 心強がる, 心細がる, 寝苦しがる, 待ち遠しがる, 物珍しがる など
 村人が外国人を物珍しがる。
 → * 村人による外国人の物珍しがり
 cf. 村人が外国人に感じる物珍しさ
- d. 切ながる, かたじけながる, もったいながる, 申し訳ながる, 情ながる など
 主婦が廃棄野菜をもったいながる。
 → * 廃棄野菜に対する主婦のもったいながり
 cf. 主婦が廃棄野菜に感じるもったいなさ

これらの心理動詞を含む文の内容を表す名詞句に含まれるのは、もとになる形容詞や形容動詞に名詞化接尾辞「-

さ」が付加された派生名詞である。接尾辞「-さ」を伴う名詞は、経験者に生じた感情の名前を表す結果名詞の解釈も可能であり、状態の名詞化との区別は難しいが、状態を表すことができる場合には、名詞化されているのは経験者が持つにいたった心理状態そのものである。動詞の受身形や使役形の名詞化ができないと同様に、ある心理状態にいたる過程やその心理状態を感じるという行為を表す「-がる」形の動詞も、経験者が持つにいたった心理状態を表現することができないという理由で名詞化されないのかもしれない。

杉岡(1992)⁷⁾によれば、日本語の心理動詞を分類する基準は、その動詞を含む文の主語以外の補語が感情を引き起こす原因を表すのか、それとも感情が向けられる対象を表すのかの違いである。杉岡(1992: 365)が挙げた以下の例では、心理動詞が与格「に」を伴う補語をとる(8a)の文に現れる動詞が前者、心理動詞が対格「を」を伴う補語をとる(8b)の文に現れる動詞が後者である。与格補語と対格補語の両方をとることができる(8c)の文に現れる動詞については、与格補語は感情の原因を表し、対格補語が感情の対象を表すという違いが観察される。

- (8) a. 太郎が試験の結果に失望した。
 花子がニュースにおどろいた。
 子供が大きな音におびえた。
 学生が先生の話に感動した。
 殺人犯が罪悪感に苦しんでいる。
- b. 太郎がテニスを楽しんだ。
 花子が失敗を恐れる。
 先生が学生の非行を心配する。
- c. 花子が合格の知らせによるこんだ。
 花子が志望校合格をよるこんだ。
 村人が牧師の死の知らせに悲しんだ。
 村人が牧師の死を悲しんだ。
 企業が経営の悪化に悩んでいる。
 学生が成績が悪いことを悩んでいる。

前節で確認したように、英語においても日本語においても、心理動詞が名詞化されて事象解釈を持つ場合は経験者の心理状態を表す。上の(8)に挙げた2種類の心理動詞を含む文を名詞化した(9)の例の場合にも、感情の原因は「による」を伴った形で派生名詞を修飾し、感情の対象は「への」や「に対する」を伴った形で派生名詞を修飾するという違いがある。しかし、動詞連用形が転換名詞として用いられたり、「する」を伴う漢語動詞がもとの漢語名詞に戻ったりする場合、それが経験者の心

理状態を表すという点では違いはないようである。

- (9) a. 試験の結果による(太郎の)失望, ニュースによる(花子の)おどろき, 大きな音による(子供の)おびえ, 先生の話による(学生の)感動, 罪悪感による(殺人犯の)苦しみ
 b. ²² テニスに対する(太郎の)楽しみ^{注6)}, 失敗に対する(花子の)恐れ, 学生の非行に対する(先生の)心配
 c. 合格の知らせによる(花子の)よろこび, 志望校合格に対する(花子の)よろこび, 牧師の死の知らせによる(村人の)悲しみ, 牧師の死に対する(村人の)悲しみ, 経営の悪化による(企業の)悩み, 成績が悪いことに対する(学生の)悩み

加えて, 対格補語をとる動詞を含む(9b, c)の例が示すように, 転換名詞や「する」の語幹となる名詞も「意味格+の」で現れることから, 対格補語をとる動詞と与格補語を取る動詞は, どちらも項構造をもたないという点でも違いがないようである^{注7)}。

本節では, 心理動詞には連用形からの転換名詞が可能なものがあり, 事象解釈を持つ場合の意味は経験者の心理状態であることを確認した。なお, 心理動詞の中にも2つの語からなる複合動詞がある。伊藤・杉岡(2002: 94, 101-2)⁶⁾は, 単純動詞の連用形からの転換名詞が少ないのに対して, 複合動詞は事象名詞を作りやすいことを指摘しているが, 与格補語を取る心理動詞(10a)にも対格補語をとる心理動詞(10b)にも, 連用形からの転換名詞が事象解釈を持つ例はないようである。

- (10) a. 驚き入る, あきれ返る, あきれはてる, 困りはてる, 困りぬく, 困りきる, ふるえあがる, 飽きたる, こいこがれる, はじいる など
 警察官が不注意にあきれ返る。
 → * 不注意による警察官のあきれ返り, * 不注意に対する警察官のあきれ返り
 b. 思い煩う, 思い悩む, 好き好む, 忌みきらう, 見染める, 見上げる, 見下げる, 見くださ, 思いやる, 待ちかねる, 待ちわびる, 待ちこがれる, 待ちあぐむ, こいねがう など
 弟は父の帰国を待ちわびている。
 → * 父の帰国に対する弟の待ちわび
 来園者が動物の意思を思いやる(ことのできる施設)。
 → ² 動物の意思に対する来園者の思いやり(を促す施設) cf. 動物への思いやり

これらの心理動詞については, 「思いやる」の連用形からの転換名詞「思いやり」が結果名詞としてよく使われることを除いて連用形からの転換名詞がないことから, 先に述べた複合動詞は事象名詞を作りやすいという一般化に反しているように思われる。ただし, 以下の(11)に挙げた例が示すように, 和語の単純動詞や漢語の動詞の中にも連用形がそのままでは名詞として成り立たない例は多数あるため, 複合動詞であることが名詞用法を妨げているとは考えにくい。

- (11) a. おじける, おののく, こる, ほれる, こがれる, なつく, やける, 甘んずる, ふける など
 作家が扉絵に凝る。
 → ²² 扉絵に対する作家の凝り, ²² 扉絵による作家の凝り
 b. 憂える, 好く, めでる, 懐かしむ, 嫌う, いたう, うとむ, うとんじる, やく, 慕う, 仰ぐ, あがめる, 尊ぶ, たつとぶ, 重んじる, いやしむ, あまつたれる, 惜しむ, 悼む, 哭する, 弔する, 謝する, 期す, いばる, 恋する, 偲ぶ, 怪しむ, いぶかる, いぶかしむ, 危ぶむ など
 観光客が石庭を愛でる。
 → * 石庭に対する観光客の愛で
 c. 困る, おこる など
 私が五輪開催におこる。
 → * 五輪開催による私のおこり
 野球選手が記者をおこる。
 → * 記者に対する野球選手のおこり
 cf. 市民が開催の決定にいかる。
 → 開催の決定による市民のいかり
 選手が記者の発言にいかった。
 → 記者の発言による選手のいかり

(10)で観察したように複合動詞の連用形からの転換名詞には事象解釈がないことが心理動詞の特徴であるのかどうかについては, 「思いやり」の事象解釈の可否と併せてさらなる検討が必要であるが, ここでは, (10), (11)に挙げた心理動詞の連用形に名詞用法がないのは, この用法が不安定であるためと考えることにする。

3. 心理形容詞と形容動詞から派生する名詞

杉岡(1992)⁷⁾は, 対格補語をとる動詞は形容詞を派生することが可能であるのに対して, 与格補語をとる動詞は形容詞を派生することができないことを指摘し, この形容詞派生の可否が2種類の心理動詞構文の大きな違いであると結論している。杉岡(1992: 369)⁷⁾が挙げた

以下の例が示すように、対格補語をとる(12a)の心理動詞構文は形容詞を含む述語で言い換えることができるのに対し、与格補語をとる(12b)の心理動詞構文にはそのような言い換えはない。

- (12) a. 住民が噴火を恐れる。
一 住民には噴火が恐ろしい。
花子が太郎をうらやむ。
一 花子には太郎がうらやましい。
私は円満な解決を好む。
一 私には円満な解決が好ましい。
よるこぶ／よるこぼしい、ねたむ／ねたましい、
憎む／憎らしい、望む／望ましい
- b. おどろく／*おどろかしい、とまどう／*とまどわしい、うろたえる／うろたわしい、怒る／*怒らしい

つまり、対格補語をとる心理動詞「恐れる」には、連用形からの転換名詞「恐れ」に加えて、共通する語幹を持つ形容詞「恐ろしい」に接尾辞「一さ」を付加して派生した「恐ろしさ」が成り立つことになる。

対応する形容動詞を持つ漢語の心理動詞の数は少ないが、「一さ」の付加によって名詞化する語に(13a)の「退屈だ」がある。また、連用形からの転換名詞を持つ和語の動詞に対応する形容詞や形容動詞には、(13a)の例のほか、(13b)の形容詞と形容動詞があり、ほとんどのものが「一さ」の付加によって名詞化できるようである。

- (13) a. 退屈する：退屈だ
学生が先生の話に退屈する。
一 先生の話による学生の退屈
先生の話が学生には退屈だ。
一 学生が先生の話に対して感じる退屈さ
- cf. 安心だ：安心する、心配だ：心配する、満足だ：満足する など
先生が学生の非行を心配する。
一 学生の非行に対する先生の心配
学生の非行が先生には心配だ。
一 * 学生の非行に対する先生の心配さ
- b. 悲しむ：悲しい、楽しむ：楽しい、苦しむ：苦しい、おそれる：おそろしい、懐かしむ：懐かしい、うらやむ：うらやましい、憎む：憎い、あわれむ：あわれだ など
殺人犯が罪悪感に苦しんでいる。
一 殺人犯の罪悪感による苦しみ(9a)
罪悪感が殺人犯に苦しい(こと)。
一 殺人犯が罪悪感に対して感じる苦しさ

- cf. 花子が失敗を悔やんだ。
一 * 失敗に対する花子の悔やみ
失敗が花子に悔しかった(こと)。
一 花子が失敗に対して感じる悔しさ
…とアドバイス通りに一年間悔しみを綴り、
…(梨 2020: 前書き)⁸⁾

対応する心理動詞構文の中では補語の位置にあった感情の対象は、形容詞や形容動詞を含む文の中では主格の「が」を伴って主語として現れる。また、対応する心理動詞構文の中では動詞の主語の位置にあった経験者は、形容詞や形容動詞を含む文の中では、格助詞「に」を伴って付加詞として現れる。そして、心理形容詞・形容動詞を含む文が名詞化されると、それが表す状態は主語である感情の対象の状態ではなく、付加詞である経験者の心理状態である。連用形からの転換名詞が経験者の心理状態(感情)の名付けであるのに対して、接辞「一さ」による派生名詞は経験者が抱く感情の性質や程度を表すと解釈することもできるため、動詞連用形からの転換名詞「苦しみ」や「恐れ」と、接辞「一さ」によって形容詞から派生された「苦しさ」や「恐ろしさ」が持つ意味についてはさらなる検討が必要である。ただし、どちらも経験者の心理状態を表し、例えば、対応する形容詞から新たに作られ、ラジオ番組を通じて使われるようになった「悔しみ」が表そうとしている特定の物語や人物から感じ取った具体的な体験とは異なるようである。

このように、心理動詞を含む文と心理形容詞・形容動詞を含む文とでは、主語と補語、あるいは主語と付加詞の語順が逆になっているにもかかわらず、名詞化されるとどちらの文も経験者の心理状態を表す。(14)の例が示すように、このことは、第1節の(1b, 2)で確認した経験者を目的語にとる英語の心理動詞構文を名詞化したときに語順が逆になる現象と類似している。

- (14) その音楽が太郎に喜ばしい。
一 太郎がその音楽に対して感じる喜ばしさ
- cf. * その知らせが太郎に驚かしい。
一 * 太郎がその知らせによって感じる驚かしさ

第2節では、名詞化に関しては与格補語をとる心理動詞と対格補語をとる心理動詞に違いはないことを確認したが、対応する「一さ」形の名詞が成り立つかどうかという点からは、名詞化についても日本語の2種類の心理動詞構文の違いがあるということができのかもしれない。

なお、共通の語幹をもつ形容詞・形容動詞が存在せず、

したがって対応する「一さ」形の派生名詞を持たない心理動詞には(15)のような和語の単純動詞もある。

- (15) a. ためらう／*ためらわしい, 迷う／*迷わしい, たしなむ／*たしなましい など
校長が運動会の中止をためらう。
→ *校長には運動会の中止がためらわしい。
cf. (校長が運動会の中止に対して感じる) ためらい／*ためらわしさ
- b. しらける／*しらかわしい, あきれる／*あきらわしい, 困る／*困らわしい など
小学生が絵日記の題材に困る。
→ *小学生には絵日記の題材が困らわしい。
cf. * (小学生が絵日記の題材に対して感じる) 困り
- c. あきる／*あきらわしい, 憧れる／*憧らわしい, 惚れる／*惚らわしい など
舞踊家が浮世絵師に憧れる。
→ *舞踊家には浮世絵師が憧らわしい。
cf. (舞踏家が浮世絵師に対して感じる) 憧れ／*憧らわしさ

対格補語をとる(15a)の動詞と同様に,(15c)の動詞もその補語が経験者の感情の対象を表すように解釈できるが,これらの動詞も補語が経験者の感情の原因を表す(15b)の動詞と同様に与格補語をとる動詞である。これらの動詞が形容詞を派生することができない理由が心理動詞のタイプによるものなのかどうかは不明であるが,補語が「に」を伴い,かつ経験者の感情の対象を表す動詞には,対応する形容詞はないようである。

対応する形容詞や形容動詞がない心理動詞には,このほかに,漢語や複合語の名詞に「一する」が伴う(16a, b)のような動詞,そして,擬態語・擬音語と考えられる副詞に「一する」や「一とる」を伴う(16c, d)のような動詞がある。

- (16) a. 驚嘆する, 苦悩する, 当惑する, 激怒する, 安堵する, 憂慮する, 偏愛する, 嫉妬する, 尊敬する, 軽蔑する, 落胆する, 失望する など
コラムニストが逃げ馬を偏愛する。
→ 逃げ馬に対するコラムニストの偏愛
F1選手が低燃費技術に驚嘆する。
→ 低燃費技術による F1選手の驚嘆
- b. 八つ当たりする, 一安心する, 気兼ねする, えこひいきする, 出し惜しみする など
力士が白星に一安心する。
→ 白星による力士の一安心

コーチが選手をえこひいきする。

- 選手に対するコーチのえこひいき
- c. うっとりする, びっくりする, くよくよする, そわそわする, うんざりする, がっかりする, むかむかする, むしゃくしゃする, いらいらする など
花見客が夜桜にうっとりする。
→ *夜桜による花見客のうっとり
- cf. うきうきする, わくわくする, びくびくする, どきどきする など
- d. ぎょっとする, びっくりとする, ぎくりとする, どきんとする, しんみりする など
記者が巨大肖像画にぎょっとする。
→ *巨大肖像画による記者のぎょっと
- cf. ぼかんとする, きょとんとする, けろりとする など

漢語や複合語を語幹とする動詞にも,対格補語をとる動詞と与格補語をとる動詞の2種類が見られる。語幹の部分が複合語であり,かつ,主語以外の補語を取る心理動詞は少ないが,これは,「する」の語幹になる複合名詞の多くは複合動詞の内部で「する」の部分の目的語を充足していることとも関係がありそうである。一方,副詞に「する」を付加して作られる動詞は与格補語をとる。同じ成り立ちで主語以外の補語をとらない動詞にも,語幹の名詞用法はないようである。

4. 今後の課題

本稿は,日本語の心理述語構文について,動詞のとる経験者項が主語位置にあるか目的語位置にあるか,動詞が対格補語をとるか与格補語をとるか,そして,対応する形容詞・形容動詞があるかどうかの区別を考慮しながら,また,動詞の成り立ちが和語であるのか,複合語であるのか,漢語や擬態語を語幹とするかどうかの区別も考慮しながら,その動詞連用形からの転換名詞について考察した。そして,日本語の心理述語構文の名詞化が事象名詞解釈を持つのは,経験者を主語にとる動詞の名詞化のみであること,すなわち,語彙概念構造のうち BE AT-心理状態が名詞化されていることを観察した。

事象名詞については,単純事象名詞と複雑事象名詞の区別が存在するのかどうかの検討が必要である。特に複合動詞の連用形からの転換名詞については,事象名詞解釈の可否についても引き続き調査をする必要がある。併せて,動詞連用形からの転換名詞と形容詞に「一さ」を付加することによって派生される名詞との意味の違いに

については、後者のもとになる形容詞の観点からも細かく分類することが必要である。また、心理状態や心理状態の変化を表すと考えられるにもかかわらず対格補語も与格補語も取らない動詞やその名詞化が、今回観察した心理動詞やその連用形の名詞用法とどのように異なるのかを比較する必要もあると思われる。新しく使われるようになった用例の調査を含め、今後の課題としたい。

謝辞

本稿は2022年度後期に東京言語研究所理論言語学講座『形態論・語形成論』を担当された慶應大学名誉教授の杉岡洋子先生に提出した報告書の一部を改訂したものである。語の形と意味を観察することの楽しさを教えてくださり、丁寧な指導をしてくださった杉岡先生に心から感謝申し上げます。本稿中に残った誤りはすべて筆者の責任である。本研究に関して申告すべき利益相反 (COI) はない。

注

注1) 本稿のもととなった報告書では、朝日新聞デジタルに掲載された記事の中に見られる心理述語とその名詞化を考察した。紙幅の制限により本稿ではそれらの例文を割愛し、新たな例文を筆者が作成した。

注2) 「敬愛する」のような「動名詞+する」の動詞とは異なり、「愛する」は漢字1字の動詞語幹である。「花子への太郎の愛」が「愛する」という状態の名詞化であるのか感情の名前であるのかはわかりにくい。が、「花子に対する太郎の愛は死ぬまで続いた」のような文の中では、事象解釈がされていると思われる。

注3) 心理動詞の中では「いやがる」の使役形「いやがらせる」に連用形からの転換名詞があり、悪意のある「言動」を意味する。

例) 翌年もこの児童に対するいやがらせが続いた。
／* 級友による登校へのいやがらせ
これは語彙化された名詞で、事象解釈と思われるが、「級友が児童に登校をいやがらせる」の意味での事象名詞としての解釈はできない。

注4) 語彙的な使役形と統語的な使役形が連用形の名詞用法の可否において異なるのは、統語操作と考えられる受身と同様に、統語的な使役も統語部門で作られるためであると考えられる。(cf. 伊藤・杉岡 (2002: 108-9)⁶⁾)

注5) (7a) に挙げた動詞のうち、「かわいがる」には連用

形「かわいがり」からの転換名詞があり、上位の力士が若手力士に対して行う「しごき」などを意味する。

例) 角界ではかわいがり愛情だとみられている。
／* 兄弟子による弟弟子のかわいがり

これは特定の集団で使われる語彙化された名詞で、事象解釈を持つと思われるが、主語「兄弟子」の心理状態としての解釈はできない。

注6) 「楽しみ」を太郎の心理状態として解釈する用法は筆者の周辺では文法的とは判断されず、この例の容認度が低いことがわかる。動詞「楽しい」の連用形からの転換名詞「楽しみ」は、「テニスが毎週末の太郎の楽しみだ」のように、楽しいと感じる物事や趣味、娯楽を表す結果名詞としての解釈は可能であるが、状態の名付けにはなりにくいようである。

注7) 対格補語が「の」を伴うことは可能であるが、「テニスの楽しみ」、「失敗の恐れ」、「非行の心配」、「合格のよろこび」、「死の悲しみ」などに見られる「名詞+の」は項ではなく、名詞の修飾であるように思われる。

引用文献

- 1) Postal, P. *Cross-Over Phenomena*, Holt, Rinehart and Winston (1971).
- 2) 影山太郎「語彙概念構造 (LCS) 入門」『レキシコンフォーラム』No.4 (4) ひつじ書房, 東京 (2008).
- 3) 国立国語研究所『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書, 東京 (2004).
- 4) 朝日新聞デジタル, <https://www.asahi.com> (参照 2020-1-1から2023-1-15).
- 5) 松村明 (編)『大辞林』(第4版) 三省堂, 東京 (2019).
- 6) 伊藤たかね・杉岡洋子『語のしくみと語形成』研究社, 東京 (2002).
- 7) 杉岡洋子「心理述語についての考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第24号: 361-373 (1992).
- 8) 梨うまい『悔しみノート』祥伝社, 東京 (2020).

参考文献

- Grimshaw, J, *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA (1990).
- Jackendoff, R, *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA (1990).